

書評・紹介

Charlotte Höhn and Rainer Mackensen,
Determinants of Fertility Trends: Theories Re-Examined,
Liege: Ordina Editions, 1982, 311 pp.

本書は、1980年4月12~14日に西ドイツの Bad Homburg において開かれた国際人口学会 (IUSSP) Seminar on "Determinants of Fertility Trends: Major Theories and New Directions for Research" に提出された15篇の出生力の決定要因に関する論文を、ベルリン技術大学社会学教授ライラー・マケンセンと西ドイツ国立人口研究所のシャルロット・ヒヨーンが編さん、さらに国際人口学会出生力比較研究委員会長のアンリ・レリドン (Henri Leridon) が「結び」をつけたもので、欧米を中心とした出生力の社会経済理論の最前線を示すものである。

現在、形式人口学の最大の潮流は、Coale-Brass-Preston-Hobcraft-Trussel-Hill-Zlotnik-Finney らを主軸とする低開発国の不完全な人口統計を評価し、正しい出生率・死亡率の指標を求めるという人口統計検定論・推定論である。それ以外のものとして、人口モデル研究（それは生物人口学的モデルの整備と経済人口モデル構築の二つの方向が見られるが）、さらに出生力の社会経済要因論、家族人口学、移動要因論が最近多くの俊秀を集め活発な研究が行われている領域である。出生力の社会経済要因論は、米国のインディアナポリスタデイを濫觴として、多くの実証研究に支えられた伝統を持つが、最近では、社会学者だけでなく経済学者、心理学者、人類学者がこの領域にそれぞれの学問の分析方法をもって切り込んで来始めたのが特徴的である。

本書に提出された15篇の論文の題目と著者について記すと次の通りである。

①Rudolf Andorka の「先進国における差別出生力研究からの教訓」、②Harvey Leibensteinの「出生力の経済理論において効用最大化の仮定をゆるめることに関して」、③Yoram Ben-Porathの「出生力理論における契約要素」、④Judith Blake と Jorge Del Pinal による「教育程度による子供の数の選好」、⑤Lutz von Rosenstiel, Günter Oppitz, Martin Stengel の「再生産行動の動機付け」、⑥Rodolfo A. Bulatao の「子供の価値の変せんと出生力転換」、⑦Philippe Ariès の「西欧における出生率低下に関する二つの連続した動機」、⑧John Simons の「宗教的行為としての再生産力行動」、⑨Geoffrey McNicollの「出生力変動の制度的要因」、⑩John C. Caldwellの「出生力低下に関する世代間の富の流れの理論」、⑪C. Safilios-Rothschildの「途上国における出生力変動を説明するものとしての階級と男女別の階層分けによるモデル」、⑫Shapan Adnan の「新マルクス主義的解釈による途上国における出生力低下の理論化」、⑬Gerardo Gonzales-Cortes の「開発の様相と出生力低下のいくつかのガイドライン」、⑭Rainer Mackensen の「社会変動と出生力行動——たえまなき変換」、⑮Geoffrey Hawthorn の「現代のパラドックス：北・西ヨーロッパにおける1950年以後の出生力決定要因」。

以上の論文の中でもっとも興味深かったのは最後のホーソンの論文で、社会学の立場から、欧米での最近の超低出生率出現の背景を社会思潮的に説いている。現在の欧米人の抱く世界観は「子供を生み、育てる」という生活形態からはあまりにも遠くなっているとしている。Arièsの興味ある論文も「もはや欧米で子供は家庭の王様ではなくなった」というもので、ホーソンの言っていることと似ている。プラタオの論文は力作であり、彼が過去10年間行った「Value of Children Study」の総決算を示し、現実の資料に基づいているだけに説得力がある。ライベンシュタインとベンポラスの出生力の経済学理論は啓蒙的であるが、実際のデータで検証したわけではないので限界がある。これは、コールドウエルの「世代間の富の流れ」理論についても同様である。以上の掲載論文は単に欧米だけにとどまらず、途上国の出生力を説明しようとするものも相当あり、きわめて多彩である。

難を言えば、論文の筆者の選定に少しくせがあり、米国から Westoff とか Easterlin が入っていないこと、あるいは Ronald Freedman の系列の学者が入っていないことが気になった。

(河野 潤果)